

しかしながら、こちらは言語の不自由な外国人。とくに電話の会話は、相手の顔も見られないし、身ぶり手ぶりも使えませんので、負担が大きいのです。その困難な状況が、相手にはまったく理解できず、ふだん会っているときと変わらない様子で、とりとめなく話を続けます。わたしは調子を合せながらも、早く会話が終わってほしいと、そればかり願っていました。

電話にしかない魅力というものが存在することは、それでも理解しているつもりです。このことは、レニングラードで経験しました。

あるとき、年末から年始にかけてのツアーで通訳をしていました。正月を跨いでの仕事だったのですが、さすがに 12 月 31 日の夕方から 1 月 1 日の午前中はお役御免となり、自由時間ができました。そこで現地の知人に電話をかけてみると、奇跡的に繋がって、しかも大晦日を祝うから、これからバスに乗って自宅まで来いというのです。バスは電話と同じくらい苦手なのですが、なんとか乗り継いで、年末の一般家庭に寄せてもらいました。

ソ連時代の新年は宗教色なしでお祝いし、クリスマスツリーみたいなものが飾られ、深夜にソヴェーツコエ・シャンパンスコエというソビエト・スパークリング・ワイン（甘口）を飲む。そのときテレビでは、共産党書記長または大統領の演説が流れる。こういったことはどこかで聞いたことがあって、みんな知っていました。

でも 0 時になってクレムリンの時計塔の鐘が鳴ると、その場にいる人はお祝いのことばをお互いに述べ合い、それから知り合いにジャカジャカ電話することは、知りませんでした。日本ではそういう習慣がないと思うのですが、皆さんはいかがですか。

声を聴かせるというのは、やはり大切なんですね。わたしだって、親しい人と会えなければ、せめて声くらい聴きたいと思います。

さて、ロシア語の電話が苦手なわたしでも、語学力の進歩とともに、だんだんこなせるようになりました。好きではなくても、電話での受け答えはやっぱり必要です。

21 世紀になってから、わたしはリトアニア語の研修で、第 2 の都市カウナスで夏休み一か月間を過ごしたことがあります。宿泊は大学から遠くない場所に部屋を借りました。初日に大家さんと会い、カギを受け取りながら注意事項の説明を受けます。ロシア語が分かる年配の方でよかったです。滞在中もときどき電話をくれて、困ったことがないかと様子を尋ねてくれました。

あるとき、部屋の電話が鳴ったので、また大家さんから確認の電話だろうと受話器を取ったら、聞き覚えのない声がリトアニア語で何かまくし立てています。

昔のわたしだったら、さぞや慌てたことでしょう。しかし、そのときは違いました。

まずリトアニア語で「わかりません」といいます。そのくらい習いました。それからロシア語で続けます。「いいですか、ここは個人宅で、わたしは部屋を借りている日本人です。他に誰もおりません」

相手は一瞬、声を詰まらせ、それからロシア語で二言三言、遠慮がちに何かを尋ねるのですが、さっぱり聞き取れません。そこでさらに答えます。

「繰り返します。あなたの求める人はここにいません。電話番号を確かめてください」

いやはや、我ながらずいぶん態度が変わったものです。馬齢を重ねると、ずうずうしくなるのでしょうか。もうロシア語の電話も怖くありません。

でも、相変わらず嫌いです。

~~~~~

## <日ロ交流情報>

あいちロシア協会の講演会（9 月 28 日）

「帝政ロシアの農奴劇場の世界」



9 月 28 日、あいちロシア協会（小林功会長）の第 1 回ロシアンサロン・講演会が、名古屋市内の会議室とオンラインの併用で行われました。テーマは「知られざる帝政ロシアの農奴劇場の世界」。昨年、著書『シェレメーチェフ家の農奴劇場：18 世紀ロシアのオペラ文化史』（道和書院）で日本演劇学会の河竹賞奨励賞を受賞した森本頼子さん（愛知県立芸術大学非常勤講師）が、オペラ・演劇・バレエ・音楽など今日のロシアの舞台芸術につながる帝政ロシア期の芸術文化活動について、当時の農奴劇場の資料や写真を紹介しながら、興味深く解説しました。

農奴劇場とは、富裕な一部のロシア貴族が、所有する農奴を俳優や音楽家に起用し、招待客を相手に公演を行った劇場とされ、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけてロシア全土に 173 も存在したことが確認されているそうです。領主の土地

に縛りつけられ、自由に移動することも、領主の許可なしに結婚することもできなかった農奴たちが、その中でもある程度開明的な領主のもとで、ロシア文化の基盤を作り上げてきたことがよくわかる講演会でした。

## ロシア料理とロシア音楽の夕べ (9 月 27 日)

### 十三の中華料理店で本物のロシア料理を味わう

9 月 27 日、「ロシア料理とロシア音楽の夕べ」(主催; ムーザ芸術研究会、後援: 大阪日ロ協会) が、阪急『十三』駅前の中華料理店「隆福」にて開催されました。会場は中華料理店ながら、調理するのはオレーグ・ゴルジェンコさんとセルゲイ・ズイリンさんというプロのロシア料理人。ビーツ (赤



カブ) を使ったサラダや、きのこスープ、ブリヌイなどロシア料理を味わいながら、主催者であるヨコタ村上孝之さんのバイオリン演奏 (チャイコフスキーの「アンダンテ・カンタービレ」ほか) やロシア歌謡 (モスクワ郊外の夕べ、黒い瞳など) を楽しみました。

## 風に舞う、情熱と哀愁のロシア音楽

### 大阪ロシア総領事館でアコーディオン・ライブ



バヤン (ロシア独特のボタン式鍵盤アコーディオン) をご存じですか? 9 月 13 日、大阪・豊中市の在大阪ロシア総領事館にて、アコーディオン奏者後藤ミホコさんと、バヤンの名手

スタス・ヴェングレフスキーさん (モルドバ出身、アメリカ在住) の競演によるアコーディオン・ライブが開催されました (主催; 関西日ロ文化サロン)。コンサートは「黒い瞳」「百万本のバラ」など後藤ミホコさんのロシア歌謡の演奏に始まって、スタス・ヴェングレフスキーさんがピアノでさえ難しいピアノ曲、フランツ・リストのラ・カンパネラを 10 本の指で目にも止まらぬ速さで演奏、またスタスさん作曲のオリジナル曲を披露するなど、観客を魅了しました。

コンサートのあとは出演者やロシア領事館スタッフとともにロシア料理の立食パーティ。和やかな歓談が続きました。テルスキフ・アレクサンダー総領事が「どんな政治状況になっても、文化交流を通じて日露の友好関係を維持する必要がある」と力強くあいさつされたのが印象的でした。

## 今年も8月23日に開催(千鳥ヶ淵戦没者墓苑) シベリア・モンゴル抑留犠牲者追悼の集い

今年もシベリア・モンゴル抑留犠牲者追悼の集いが、東京・千代田区の千鳥ヶ淵戦没者墓苑で、スターリンが「シベリア抑留」の秘密指令を発した 8 月 23 日にしめやかに行われました。存命の抑留経験者の平均年齢が百歳を超え、遺族も高齢化している中で、シベリア抑留の実態解明や犠牲者の遺骨収集はまだ十分に進んでいません。追悼の集いには、自民党・公明党・立憲民主党など各政党の代表があいさつに立ち、実態解明と歴史の継承に力を入れ、遺骨収集を押し進める決意を表明しました。

## モスクワの日本文化フェスティバル HINODE JAPAN 10 月 18-19 日開催

2012 年からモスクワで行われている日本文化の紹介イベント HINODE JAPAN 2025 が、今年は 10 月 18 日~19 日の 2 日間、モスクワのティミリャゼフセンターにて開催されます。今回は、大相撲の元力士(豊ノ島と大喜鵬)が公開稽古などを披露するほか、アニメ声優で歌手の平野綾のコンサート、画家やコメディアンなどの多彩なパフォーマンスが予定されています。

日本におけるロシア文化フェスティバルと同様、ロシアにおける日本文化イベントが、これからも活発に続くことを期待しています。

